

地酒ラベルでめぐる 北海道の酒蔵紀行

ライター／能登亨樹

『ほっかいどう地酒ラベルグラフィティー』
(亜細亜社刊)の著者であるライターの
能登亨樹が、北海道内で操業中の日本酒の
酒蔵をご案内。各蔵の地酒ラベルとともに、
歴史や見どころを紹介しします。

第1回 日本清酒(札幌)
札幌の地酒として愛される「千歳鶴」。
明治5(1872)年創業の老舗酒蔵。



「千歳鶴」といえばこのラベル。ひげ文字の酒名を円形の帯と二羽の鶴が囲むデザインは現在も定番酒のラベルとして使用されている



日本清酒株式会社(札幌市中央区南3条東5丁目2番地)
TEL 011-221-7570

札幌で本格的な酒造りが始まったのは明治初期の開拓期。豊平川の扇状地の上に拓かれた札幌は良質な伏流水に恵まれ、市街地には次々と酒蔵が立ち上がりました。

石川県能登出身の柴田與次右衛門は明治5(1872)年、創成川のほとりに柴田酒造店を開業。どぶろくなどの濁酒が開拓使の役人たちから好評を得ると、続いて清酒の醸造にも着手し、これが後の日本清酒の設立につながっていきます。

現在、道内では16の日本酒の酒蔵が操業していますが、札幌にあるのは日本清酒のみ。すす

きの飲食店を取材していると「酒はやっぱり『千歳鶴』だね」という店主さんとたくさん出会いますが、唯一の「札幌の地酒」として愛されつづけているんですね。

JR札幌駅から札幌市営地下鉄南北線を通り大通駅かすすきの駅で降りれば、本社工場に併設された「千歳鶴酒ミュージアム」までは徒歩圏内。ここでしか購入できない銘酒が購入できます。

私のおすすめは、工場の裏手を流れる豊平川周辺の散策。北海道の酒造りの歴史に思いを馳せながら、広々とした河原を歩いてみるのも旅の思い出になりそうです。



ほっかいどう地酒ラベルグラフィティー

編著 能登亨樹／監修 和田由美 B5判変型／168頁(オールカラー)
定価 3,300円(本体3,000円+税10%)

明治期のビンテージラベルから現役16蔵の最新ラベルまで、約500枚の地酒ラベルを収録。ラベルの変遷を通して、北海道の酒造史をたどる一冊です。

道内各地の書店や
ネット通販サイトで
発売中!

地酒ラベルでめぐる 北海道の酒蔵紀行

ライター／能登亨樹

『ほっかいどう地酒ラベルグラフィティー』
(亜瑠西社刊)の著者であるライターの
能登亨樹が、北海道内で操業中の日本酒の
酒蔵をご案内。各蔵の地酒ラベルとともに、
歴史や見どころを紹介します。

第②回 田中酒造(小樽)
北海道の鉄道発祥の地・小樽で
歴史を受け継ぐ唯一の造り酒屋。



旧デザインのラベルを復刻した「純米吟醸 宝川」は、
本店(小樽市色内3丁目2-5/TEL 0134-23-0390)
のみの取り扱い



亀甲蔵(小樽市信香町2-2
/TEL 0134-21-2390)

小樽港と幌内炭鉱を結ぶ
北海道初の鉄道「官営幌内
鉄道」が開通したのは明治
15(1882)年のこと。良質
な水に恵まれ、港町のため、
原料米も入手しやすかった小
樽は、最盛期の明治末期に
は50軒ほどの造り酒屋がひ
しめく「酒の都」でもありま
した。

新天地での成功を夢見て
岐阜県大垣市から移住して
きた田中市太郎は、明治32
(1899)年に色内町で田中
酒造を創業。焼酎の製造から
酒造を始め、大正12(192
3)年から清酒の醸造を開始

しています。

以降、激動の戦中・戦後を
乗り越えて、小樽に残る造り
酒屋は、今や田中酒造のみ。
現在は市内に二つの拠点を
構えています。

JR小樽駅から徒歩約15
分、小樽運河のほど近くにあ
る本店は、小樽市の歴史的
建造物に指定されている木
造2階建ての店構えが目印。
一方、四季を通じて醸造過程
を見学できるのが、JR南小
樽駅から徒歩約7分の位置
にある亀甲蔵。いずれも、小
樽散策の立ち寄り先としてお
すすめです。



ほっかいどう地酒ラベルグラフィティー

編著 能登亨樹／監修 和田由美 B5判変型／168頁(オールカラー)
定価 3,300円(本体3,000円+税10%)

明治期のビンテージラベルから現役16蔵の最新ラベルまで、約500枚の地酒
ラベルを収録。ラベルの変遷を通して、北海道の酒造史をたどる一冊です。

道内各地の書店や
ネット通販サイトで
発売中!

広告サイズ (H193×W125mm)

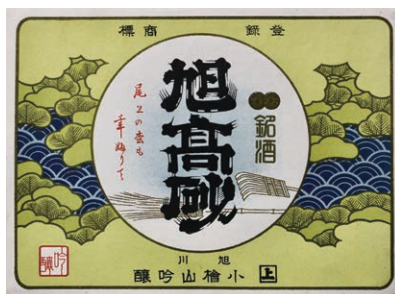
(時刻表はA5版)

地酒ラベルでめぐる 北海道の酒蔵紀行

ライター／能登亨樹

『ほっかいどう地酒ラベルグラフィティ』（亜瑠西社刊）の著者であるライターの能登亨樹が、北海道内で操業中の日本酒の酒蔵をご案内。各蔵の地酒ラベルとともに、歴史や見どころを紹介します。

第③回 高砂酒造（旭川）
“北海の灘”の伝統を守りつつ、
新たな挑戦も続ける名門酒蔵。



大正5(1916)年に誕生し、蔵を代表する銘柄となった「旭高砂」。戦前のレトラベルは蔵名などが右横書きに



高砂酒造（旭川市宮下通17丁目右1号／TEL 0166-22-7480）まではJR旭川駅から車で約5分

旭川と札幌方面とを結ぶ鉄道が開通したのは明治31（1898）年。その3年後には旧陸軍の第七師団が移駐し、旭川の町は一気に発展を遂げました。

福島県会津出身の小檜山鐵三郎は、前途有望な旭川に移り住むと、明治32（1899）年に小檜山酒造店を創業。戦前の主力銘柄「旭高砂」は、大正末期から昭和初期にかけて“北海の灘”と呼ばれた旭川を代表する銘酒となりました。

社名を現在の高砂酒造に変更したのは、昭和40（19

65）年のこと。「旭高砂」に代わる主力銘柄「国士無双」シリーズを中心に、市民と協力して田植えから取り組む純米吟醸酒「農家の酒」、若手社員が日本酒の新たな魅力の創出を目指すプロジェクト「若蔵」など、名門の伝統を受け継ぎつつも、新たな挑戦を続ける蔵元でもあります。

土蔵造りの直売店「高砂明治酒蔵」には蔵元限定酒をはじめ、酒飲みの心をくすぐる魅力的な商品がずらり。また、併設する資料館も見応え十分です。



ほっかいどう地酒ラベルグラフィティ

編著 能登亨樹／監修 和田由美 B5判変型／168頁（オールカラー）
定価 3,300円（本体3,000円＋税10％）

明治期のビンテージラベルから現役16蔵の最新ラベルまで、約500枚の地酒ラベルを収録。ラベルの変遷を通して、北海道の酒造史をたどる一冊です。

道内各地の書店や
ネット通販サイトで
発売中！

広告サイズ（H193×W125mm）

（時刻表はA5版）

地酒ラベルでめぐる 北海道の酒蔵紀行

ライター／能登亨樹

『ほっかいどう地酒ラベルグラフィティー』
(亜瑠西社刊)の著者であるライターの
能登亨樹が、北海道内で操業中の日本酒の
酒蔵をご案内。各蔵の地酒ラベルとともに、
歴史や見どころを紹介します。

第4回 二世古酒造(倶知安町)
名水と地場産酒米で醸す銘酒が好評。
ニセコ地区唯一の三角屋根が目印の造り酒屋。



遊筆家とも名乗った書家の
若山象風氏による、躍動感
ある筆運びで書かれた酒
名と縦長のラベルは、店頭
でも目を引く



二世古酒造(虻田郡倶知安町字旭47 /
TEL 0136-22-1040)／試飲・購入可

今や世界的な高級リゾート
地として知られるようになった
ニセコ地区。このエリアで唯一
の造り酒屋が、大正5(1916)
年創業の二世古酒造です。

「蝦夷富士」と称される羊蹄
山の噴き出し湧水とニセコ山
系の名水を用い、周辺の町村
で収穫された酒造好適米「彗
星」や「吟風」を使って醸す酒
は、高い評価を獲得。道内の飲
食店や全国のファンに広く愛
飲されています。

蔵元杜氏の水口渉氏は、天
然の乳酸菌で酵母を育む伝統
製法の生酛(きもと)造りに挑戦

するなど、さまざまなアプロー
チで酒質の向上を図ってまし
た。自ら手配してデザインを切り
替えたという縦長のラベルは、
道産酒の愛好家にとってはす
かりおなじみになっています。

さて、北海道の鉄道好きに
とって、小樽駅一長万部駅間を
結ぶ函館本線、通称「山線」と
いえば、一度は乗っておきたい
路線の一つ。二世古酒造ま
では、小樽から快速ニセコライ
ナーか普通列車に乗ってJR倶
知安駅で下車し、徒歩約10分。
三角屋根のかわいらしい建物
が目印です。



ほっかいどう地酒ラベルグラフィティー

編著 能登亨樹／監修 和田由美 B5判変型／168頁(オールカラー)
定価 3,300円(本体3,000円+税10%)

明治期のビンテージラベルから現役16蔵の最新ラベルまで、約500枚の地酒
ラベルを収録。ラベルの変遷を通して、北海道の酒造史をたどる一冊です。

道内各地の書店や
ネット通販サイトで
発売中!

地酒ラベルでめぐる 北海道の酒蔵紀行

ライター／能登亨樹

『ほっかいどう地酒ラベルグラフィティ』（亜瑠西社刊）の著者であるライターの能登亨樹が、北海道内で操業中の日本酒の酒蔵をご案内。各蔵の地酒ラベルとともに、歴史や見どころを紹介します。

第5回 男山（旭川市）
地元で、世界で愛される伝統の銘酒。
多彩な味わいの酒造りにも果敢に挑戦。



山崎酒造時代のラベル。男山八幡宮（現在の石清水八幡宮）のしめ縄とひげ文字の酒名の周囲に、由緒ある家紋や印を配している



男山株式会社（旭川市永山2条7丁目1-33／TEL 0166-76-5548）

名酒「男山」の歴史は古く、そのルーツは350年以上前の江戸時代、上方の酒どころだった伊丹の地までさかのぼることができます。

この由緒正しき銘酒のブランドを正式に継承したのが、明治20（1887）年に山崎酒造として創業した現在の男山株式会社です。

大雪山系の豊かで上質な仕込み水をベースに、生酛（きもと）造りなどの伝統製法を守り続ける一方、新たな味わいの酒造りにも果敢にチャレンジ。また、早くから海外への輸出にも取り組んできた国際

派の蔵元でもあります。

例年2月には数千人が訪れる「酒蔵開放」を開催。私も昨年参加しましたが、極寒の野外で振る舞い酒をいただける最高のイベントでした！

令和6（2024）年9月には家族で楽しめる「OTOKOYAMA SAKE PARK」をオープン。歴史的資料がそろった「酒造り資料館」（旧館2・3階）も見どころ満載なので、ぜひ一度は訪ねてほしい地酒蔵です。

JR旭川駅から車で約20分、石北本線・南永山駅から同約7分。バス停は「永山2条6丁目」が最寄りです。



ほっかいどう地酒ラベルグラフィティ

編著 能登亨樹／監修 和田由美 B5判変型／168頁（オールカラー）
定価 3,300円（本体3,000円＋税10％）

明治期のビンテージラベルから現役16蔵の最新ラベルまで、約500枚の地酒ラベルを収録。ラベルの変遷を通して、北海道の酒造史をたどる一冊です。

道内各地の書店や
ネット通販サイトで
発売中！

地酒ラベルでめぐる 北海道の酒蔵紀行

ライター／能登亨樹

『ほっかいどう地酒ラベルグラフィティ』（亜瑠西社刊）の著者であるライターの能登亨樹が、北海道内で操業中の日本酒の酒蔵をご案内。各蔵の地酒ラベルとともに、歴史や見どころを紹介します。

第6回 福司酒造（釧路市）
道東の港町・釧路の老舗造り酒屋。
蔵開き限定酒「たれ口酒」に注目。



敷島商会時代の定番ラベル。酒名を破魔矢や小判といった縁起物で囲む図案は、現在も定番酒に受け継がれている



福司酒造株式会社（釧路市住吉2丁目13-23／TEL 0154-41-3100）

大正8(1919)年創業の福司酒造は、道東の太平洋岸の港町・釧路市に残る唯一の造り酒屋。当初は酒類や清涼飲料の卸売りを手がける合名会社敷島商会として創業し、4年後に製造免許を取得して日本酒の醸造をスタートしました。代表銘柄の「福司」を冠した現在の社名に変更したのは、平成3(1991)年のことです。

実は釧路は私の生まれ故郷でもありまして、現在も帰省するたびに立ち寄って、お酒を仕入れています。生まれ育った町に昔から続く酒蔵がある

というのは、何だか誇らしい気分になるものです。

新酒の完成を告げる風物詩になっているのが、例年4月に開催される蔵開きイベント『蔵開放デー』。年に一度、この日しか手に入らないしぼりたての生原酒「たれ口酒」が数量限定で発売されます。

私も昨年、購入してみました。これがまたしみじみとうまいお酒で大満足でした。

今年の詳しい開催日時などの情報は、同社のサイトでご確認を。小高い丘の上にある蔵までは、JR釧路駅から車で約10分の距離感です。



ほっかいどう地酒ラベルグラフィティ

編著 能登亨樹／監修 和田由美 B5判変型／168頁（オールカラー）
定価 3,300円（本体3,000円＋税10％）

明治期のビンテージラベルから現役16蔵の最新ラベルまで、約500枚の地酒ラベルを収録。ラベルの変遷を通して、北海道の酒造史をたどる一冊です。

道内各地の書店や
ネット通販サイトで
発売中！